

# 琉球大学学術リポジトリ

沖縄初期県政に関する政治社会史的研究：  
華族県令と「旧慣」政策を中心に

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2018-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前田, 勇樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/40987">http://hdl.handle.net/20.500.12000/40987</a>

様式第7号

学 位 論 文 要 旨

学位論文題目

沖縄初期県政に関する政治社会史的研究 —華族県令と「旧慣」政策を中心に—

琉球大学大学院

人文社会科学研究科

比較地域文化専攻

学生番号

氏 名 前 田 勇 樹

学位論文要旨（横書き楷書、ワープロ可、字数800字程度）

本論文は1879年に琉球王府を廃して設置された沖縄県について、国家史・外交史ではなく、県政史の視点から捉えなおすものである。沖縄初期県政とは、1879年の沖縄県設置直後から初代鍋島直彬県政と2代上杉茂憲県政期を指す用語として使われてきた。従来  
の研究では、設置されたばかりの沖縄県は明治政府の出先機関と位置付けられたが、その  
県政運営には県令の意向が大きく影響していた。鍋島・上杉両県令は共に近世末期の  
元藩主(旧諸侯)であり、共に明治期の大名華族であった。このような経歴を持つ人物が  
地方長官に任命されることは同時代的には非常に稀なケースであり、それに付随して多  
くの旧家臣が沖縄県に赴任した。従来この点を踏まえて分析を試みた研究はほとんど見  
られない。しかしながら、彼らは明治政府の設定する「旧慣温存」という大枠の統治方  
針を踏まえつつ、自らの「為政者」としてのロジックに従い県政運営を実行した。本稿  
ではまず具体的な県政運営の場面について、勸業・教育・衛生などに焦点を絞りそれ以  
前の動向と連関させた視点から分析を行う。諸政策においてはそれ以前の藩政運営、留  
学、藩主としての規範等が影響しており、「旧慣温存」を無視した教育・勸業・衛生面  
にこの特徴が顕れている。そして、これらを実現したのは旧家臣とくに書記官の存在で  
あった。鍋島と原忠順―上杉と池田成章など藩政時代から側近として仕えていた人物を  
通して分析を試みることも本稿の目的の一つである。また、彼らの動向や評価は同時代  
の大手新聞にも散見される。新聞資料を用いて日本国内において華族県令には何が求め  
られていたのか分析を行い、そもそもなぜ華族から県令が選ばれたのか再検討する。

さらに、タイトルに「政治社会史的研究」とあるように、県政を中心に分析する一方で、  
沖縄(琉球)社会にはどのような影響があり、沖縄の人々がどのように対応したのか考察す  
ることも本稿の目的のひとつである。